

第5期町田市民文学館運営協議会第5回議事録

- 開催日時 2022年3月22日(火) 18:00-20:10
- 開催場所 町田市民文学館 大会議室
- 出席委員 渡邊正彦(会長), 竹内栄美子(副会長), 阿部哲也, 工藤成, 熊谷玄, 瀬川ゆき, 長尾洋子, 名取玲子
- 欠席委員 平井宏典
- 事務局出席職員
野澤茂樹(館長), 加藤剛, 神林由貴子, 山端穂, 谷口朋子
- オブザーバー1名、傍聴者2名

○資料

- (資料1) 文学館に関する主な事項について(12月7日~3月21日)
- (資料2) 2021年度事業報告
- (資料3) 2021年度事業実績
- (資料4) 2021年度展覧会結果報告シート
- (資料5) 2022年度事業予定について
- (資料6) ポストコロナ時代(アフターデジタル)を意識した展覧会の実施状況について
- (資料7) 「57577展」アンケート集計
- (資料8) 「せりがやことば探検-オカシなをかしな57577」コラボについて
- (資料9) 「ことばらんどショートショートコンクール2021」報告

【次第】

○開会 館長挨拶

○議事

1 報告事項

「i. 12月7日から3月21日までの文学館の出来事」、「ii. 2021年度事業報告」、「iii. 2022年度事業予定」について事務局から報告

【委員】資料を見ると、展覧会について夏季から冬季まで目標を上回っていたが、春季だけ目標を下回ったのは会期が短かったことが影響しているのか。

【事務局】ご指摘の通りである。

【委員】その代わりに、インスタグラムやSNSが上がっていることで、工夫した取り組みをしているのではないかと思う。

【議長】教育普及事業で、館に人が来てもらえないということで、学校に出前しているいろいろな行事を行ったが、その点について感想があればお聞かせいただきたい。

【委員】非常に魅力的なものがあって、例えば町田第六小学校で宮沢賢治をやっていたが、ショートショートにかかわらず、学校のニーズと当館とのやりとりの中でいろいろな可能性があると思ったので、その辺りを学校に周知してもらえれば、各学校で教材に対してもっと深いところで説明していただけたら、そういう授業

が出来るのではないかと思った。

【議 長】ZARD展は状況が悪い中でよく健闘したと思う。

2 討議

「(1) ポストコロナ時代(アフターデジタル)を意識した展覧会(57577展)の実施状況について」

【議 長】「57577展」は昨年3月にまとめた「ポストコロナ時代の文学館事業について」の成果を受けて企画した展覧会と聞いている。委員の皆様の見解がどのように企画に盛り込まれているか興味深くお聞きいただければと思う。

〔事務局から説明〕

【議 長】委員の皆様から感想や意見を出していただきたい。

【委 員】「せりがやことば探検」の参加者は、これを目指してきた人か、それとも公園に来たら何かやっているということで参加した人たちか。

【事務局】これを目指したというよりパークラボに来て楽しんだ人たちである。

【委 員】この結果をみると、公園のような日常性の高いところに偶然性や入り口があって、そこからSNSにつながっていくことを感じられたのは驚きであった。公園の作り方とかデザインを考えるにしても、専門性の高いイベントをうつための仕掛けというよりは、短歌との出会い方をどうやってデザインできるのかとか、様々なコンテンツの入り口を作るようなこともあり得るのだということを感じたのが新鮮であった。もう一つの質問は、アンケートに答えていない96%の人が気になった。4.4%の人をそのまま割合で伸ばしていくと全体像がつかめるのか、答えた4.4%はコアなファンなのかで大分違うと思うが、その辺はどのように考えているか。

【事務局】アンケートの母数とパーセントについては気にしているところだが、結果として展覧会を比較すると4.4%であってもほしいの傾向は見えてくるのではないかと考えている。ただ、若い人はアンケートを書かない傾向にあるし、男性よりも女性の方がアンケートを書く傾向にある。なので、出口調査などをやらないと本当のところは分からない。それから、有料展のアンケート回収率は15%から20%になり、有料展の方が実態に近いと思われる。

【委 員】コアな人たちが集まってきて、その人たちの回収率が高いのであれば、もう少し踏み込んだアンケートが出来る可能性があるのではないかと思った。例えば、作家さんにフィードバックできるようなアンケートも作れるのではないか。そういう双方向を、館とお客様という関係もあるかもしれないが、出展者との関係性構築のためのアンケートなどもやれるのではないか。自分たちの場所に来てくれる人たちがどういう特性を持っているのか、どういうカテゴリーの人たちなのか分かってくるなら、逆にコミュニティを積極的に育てるための作家側とのコミュニケーションも考えられそうだった。

【委 員】定量的にみると、岡野大嗣さんのフォロワーが14,000人もいるのに、出展されている数が一番少ない。また、「57577展」はあの著名な「ZARD展」よりもアクセス数が3倍多かったという点からみると、セレブリティではないのかな

と思う。企画したものが展開してどう自分に関わってくるかという企画力がこの結果を生み出したのだと思った。だから素晴らしい結果だと思う。ことばらんど
のこれからの行く末は、「何か素晴らしいから来てください」というだけではなくて、「芹ヶ谷公園のようにそこに行くといつも何かやっているぞ」ということに土台を広めて考えた方が良く思う。何か企画して突発的に来館者が増えて良かった、というので終わるのではない土台作りを目指した方が良く。

【委員】公園のイベントには地元の町会と公園に携わっている団体の方たちと協力して、非常に盛り上がり良かった。高齢の地元の人間にとって、文学館が外に出てきて、こういうイベントをやるという発想はなかなか持てないので、この企画自体、地元の人間にとってもとても面白い企画であったし、こんなふうになれば人は喜んで楽しんでくれるという発見もあった。

【委員】初めて皆さんとお会いしたときにアフターデジタルとアフターコロナは違うという話をさせていただいた。これが、どれくらい差があって、どれくらい考え方に違いがあるか、実体がどう違うのかということ課題として捉えている。また、ニューノーマルの世界と言われているが、これがどう変わっていくか。それから、シンボリックとエクスペリアンスということで、ここで旗印になるのは何かを考えなければいけないと感じている。ニューノーマルとは何かというと、「パンデミックの後、元の世界には戻れない」と、ここでは概念として持っている。この戻れない世界観の中で、来館者数を常に気にしなければいけない、存在価値を考えなければいけない。今、お聞かせいただいたデータからどういう結果を見いだしたかということ、本当かどうか分からないが、オンラインの世界であっても、リアル、オフラインの時間帯、接点は大切であるということである。一方で、完全に元に戻ることはないので、どうやって利用者を誘っていくかということを考えるべきだと思う。その場合、目指す姿と求められる姿は近くして同じものではないということ。それからICT、DX（デジタルトランスフォーメーション）によって価値観をどうやって増大させるかということ。ここで利用しようとしている人たちのニーズを拾い上げて、それをインサイトにしていくということ。我々がこうしたいというウォンツだけではどうにもならないということが大前提になると思っている。先ほどのアンケートで出てきたが、シニア層の利用が少ないので、シニア層の利用を考えなければいけない。その場合乗り越える壁は何かというと、シニア層はコロナで外出や来館の自粛とか、利用モチベーションが減ってしまった。デジタルとは疎遠で、利用していないという人もいるだろう。若い層は、逆に文学を自分事にしにくい、何かをやっているぞと言うことをアピールしないと満足できない世代である。そこで施策を考えると、ことばらんどは何をやっているところか分からない、どういうことを満足させてくれるか分からない、というところを、皆さんが把握しやすいようにもう少し積極的にアピールしていく。これを仮にことばの総本山計画と名付けた。アプリやアーカイブを運営する文学館を町田のことばの総本山にしてしまおうということである。DXを推進しながら利用回数、接触回数、来館回数を増やして行く。シニア世代に向けては、自分事で日本語教育を海外と接点を持つことで参加していただく。若い世代に向けては

承認欲求を満たすという意味で、ここと関与することによって映えるネタを展開する。自分が表現者として存在すべきであって、ここにある有名な人とかセレブリティがいるから来るという時代は終わったと思う。ここにあるアーカイブをデジタル化して、改良したところでそれは本当のDXではない。短歌は実際にオフラインで実施されているので有望だということは分かったが、これをDX化するのはどうか。これをデジタルでアーカイブ化して、ネットで募集して、ツイッターで表現されていますといってもそれは本当のDXではない。この短歌を作成するに至るまでのプロセスがどうであるかが大事である。これを、例えば皆さんデバイスでカメラを持っているので、芹ヶ谷公園のそこそこで、デジタルカメラでARとして拾っていく。そこにある施設の花や木、芹ヶ谷公園のいろいろな自然をテーマにいろんな人が参加していく。それでARで立体的にそこにあるものを拾って、さらにこのあと一昨年提案したような言葉の樹にARとして飾っていく。それを最終的にどうするかというと、展示室に鉢があって、ベースになる幹があって、そこに展示されて、いつでもここに来館したら、実際に生で見ることが出来る。これは一つのアイデアに過ぎないかもしれないが、人を引きつけてつないでおくためには、オフラインとデジタル、リアルとの接点をずっと双方向に持ち続けることが大事ではないか。一つ一つのイベントをやりました、そしたらもう終わりですではなくて、ここに来ればそういう仕組みが存在していて、ことばらんどには常に何か用意されていて体験できる、楽しめる、ということが大切なのではないかと考えている。

【委員】「57577展」のスピーディな展開に目を見張った。これからの課題として、継続的にオンライン、オフラインという包括的なビジョンの中でDXをことばらんどが用意していくには、実際にどうすれば可能なのか。どういうふうに、恒常的にその仕組みが上手く生かされるようなものを館として用意するのかということがまだ具体的に想像できない部分がある。その具体性を持てるような話し合いが出来たら良いと思う。

【委員】ことばの総本山というのはとても良いと思った。「57577展」の展示の初めに「君が代」が出ていて、国歌は短歌かと思って認知が変わった瞬間を体験した。分かっていたけど忘れていたことがたくさんあると思った。

【委員】ことばの総本山といったときに、個人が何を思い浮かべるかというのは、今の段階ではすごく差があるのではないかなと思う。文学の王道というと、これまでは小説と思う人が結構多かったのではないかなと思う。短歌とか俳句とか、いわゆる短詩の分野は幅が広くて、歴史的にも蓄積があるし、遊びとしての嗜まれた歴史が、非常に層が厚い。それが今の短詩の文化にも影響していて、気軽に楽しんでいる層もいれば、すごく高尚なところで追及している層もいて、文学としてしまうとカジュアルな層が置いてけぼりになっていたかもしれないという感じがする。ことばの総本山と言った時に、私は少しいかめしい感じがして、カジュアルな部分が、前衛的な部分とか、遊びの部分とか、それが違う形で置いてけぼりになってしまうのは嫌だなという感じを抱いた。それも含めてことばの総本山的なものを打ち立てていければ面白いよねというスタンスはあり得ると思う。

- 【委員】例えば、遠藤周作先生が『白い人・黄色い人』を書かれて、狐狸庵でショートショートを書かれて、そこにすべてがあると思う。言葉を駆使していろんなことの介在するハブになるという意味で、ことばの総本山と言っているのではないか。
- 【委員】ハブというのと総本山というのでは相当に違う印象がある。総本山というとピラミッド的な構造をイメージするが、ハブというと機動性とか流動性という、もっと現代的な感覚にマッチした言葉の響きがある。それがどう機能するかというイメージをもう少し適切な言葉を自分たちで考えて選んでいくべきだと思う。
- 【委員】今ハブという言葉を使っていたが、そういう意味ではハブがピッタリきた。今回の「57577展」というのは、今活躍している若い作家さんの活動が既にあって、そこにいろいろな表現欲求を潜在的に持っている若い人たちを、上手にSNSや双方向型の展示であるとか芹ヶ谷公園の地域との連携というようないろいろな手法を駆使して、その結果として、とても良い、まさしくハブとしての役割を、今回ことばらんどがちゃんと方法論を打ち立てたというのは素晴らしいことだと思う。ただ、少しだけ長い間文学館という業界にいて感じるのは、文学館はことばの総本山とか、いろいろな人たちを言葉という媒介を通してハブとしての役割をすることであるということでも良いのだが、行政の側の立場としては、博物館相当施設という大前提があると思う。そうすると、博物館の場合、収蔵品、作品やその資料、それから従来型の展示というのは、今回のような進化していくような展示もあるけれど、かつてあった「物」の価値を、「物」の意味合いというのをもう一度再発見させるというような、それは様々な手法があって良いと思うが、「物」の意味合いを再発見させる場でもあると思う。だから、ことばの総本山であっても良いが、それだけではなくて、その様々な人間が残してきた事象の、生老病死の結果としての事象としての文学資料という「物」、美術資料という「物」、その他の日常の資料という「物」があって、そこからどういう物語を再発見して、これを皆様に新しい物語として受け取らせるかということをお忘れてはいけないと思う。職員の皆さんはよく分かっていると思うが、ややもすると行政の方たちはそこを少し忘れてしまうかもしれないという危惧を感じる。職員は集客とか話題になることとかが館の生命線になってしまうから、どうしてもそこに注力してしまう。けれどもむしろ行政の側の方で、この委員会の方で、「物」というものをいかに次の世代につなげていって、次の世代が別の様々な意味合い、自分たちの生きていく意味合いということにもつなげていけるか、そこをもう少し議論していただけると嬉しいと思う。
- 【委員】言葉の樹を前に提案された時に、漂流郵便局とか福井の丸岡の方で一筆啓上賞をしていて、言葉についていろいろなところで試みがされているので、言葉の樹というのは素敵なアイデアだなと思って発言した。今回、「57577展」の資料に、言葉の樹のリアルバージョンだと考えて展示したという説明があり、実際展示をみると選ばれたものが吊るされていて、選ばれなかったものもケースの中に入れていて、言葉に注目して観る人がただ観るだけではなくて、参加型の形にするというのは魅力的なものだろうと思う。ただ、私もオーソドックスな文学の考え方があって、資料に三島由紀夫展とかこれまでの展覧会の参加人数が出て

いたけれど、どういうふうに見せるかによっても集客が違うということがあると思うが、文学館の役割は資料の保存と展示ということがあると思うので、参加型の展示とこれまで人類が残してきた文学の資料・作品の保存、展示の2本立てというか、前にもオンラインとオフラインと2本立ててやっていくことが必要だろうということがあったが、展示に関しても、文学館の役割に関しても、参加型ということと資料の保存、展示の二方面が必要だと思った。先ほどのご提案だと、いつも恒常的に言葉の樹があって、ということになると、言葉の樹自体は素敵なアイデアだけど、通常の企画展示はどうなるのかという疑問が残った。

【委員】 少し補足したい。ここは博物館なので素晴らしい歴史的な資料がある。ただ、それにしても来館者が少ない。そういう文化的遺産を見る機会を、皆さん知らないのであれば、ここに来やすい環境を作るべきで、せっかくの財産が勿体ないと思う。接触機会を増やすという意味でも、デジタルなものがあって、確固たる財産があるという両方面が必要だと思う。

「(2) ことばらんどショートショートコンクール 2021 の結果について」事務局から説明

【委員】 子どもが作文を書く機会は確保されるべきだと思うし、こういう賞があれば、文学館自体を知らない子供たちもいるかもしれないので、そういう意味では良い宣伝になるのかなと思う。これをもっともっと各学校に広げていきたいと思った。是非、校長会、副校長会でプッシュしていただければと思っている。

【オブザーバー】 こういう委員会があって、地域に知るような機会が増えていくということが分かった。と同時に、受け皿的な部分で、オンラインでタッチできるような形をとることが必要になると思った。例えば、この4月には強制的にガラ携からスマホに変えられるので、年配の方もスマホをいじることになってくる。結果的に皆DXしていかないと追いついていけなくなってしまうのではないかな。文学を残すということに関してもデジタル的なものを足していったら、年配の方もそこで見る機会、知る機会が出てくると思う。ポストコロナという点では、自分が必要な時以外は出て行かなくなるようなことが増えてくるのではないかな。その場合、家で何が接触機会になるのかということ、スマホだったり i P A D だったりすることが多くなると思うので、変えていった方がよいのかなと思う。

3 その他

(1) 第6回運営協議会の確認

【議長】 さまざまなご意見をいただいた。今回出たご意見は事務局にまとめていただいて、皆様のお手元に届くことになっている。最後に第6回の運営協議会について事務局から説明していただきたい。

【事務局】 第6回目は6月に実施したいと考えている。6月14日か21日を候補日として考えている。日程を決定して連絡を差し上げるので、よろしくお願ひします。